

## アジアの女と日本の女

マーガラピー 桑原ちゑ子 3

ベトナムへミシンを送って

高橋ますみ 4

ベトナム旅行記 高橋 佐紀 20

五・四天安門前広場 芦澤 礼子 25

〈集会から〉聞こえた恨<sup>はん</sup>の声

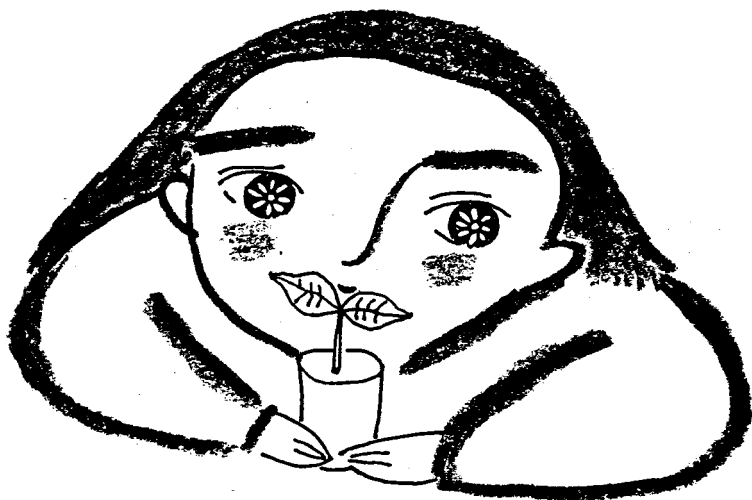
女性内閣誕生! ..... 石黒真貴子 30

女のつどい.....

初の“フェミニスト政党”誕生



今月の編集は〈あこら新宿〉 141号 400円



NOHARA・M

# 女のつとめ

日	時	テ	イ	マ	主	催	者	会	場	・	連	絡	先
5月23日(日)	16:00	「女と健康」	国際行動日	女のコンサート	あさとりみずえ他			クレヨンハウス	03140616492				
6月1日(木)	18:30	外国人のための人権を守る会	北海道発足集会	リサ・ゴ				札幌教育文化会館	札幌66412927				
6月3日(土)	18:00	二人のフェミニストを迎えて	ハーヴェイ・ミルク	上映会				高円寺会館	31815860				
6月3日(土)	13:00	入管法改悪を許すなら	6・3集会	連絡先	46211083			東京駅八重洲口国労会館					
6月3日(土)	18:00	ごろうさん!	原発いらない大行進	042214716639				西荻窪 ホビット村					
6月4日(日)	13:30	住民票統制裁判交流会	田中須美子					武蔵野御殿山コミセン					
6月4日(日)	14:00	女らしさの病・男らしさの病	小倉千加子					名古屋朝日ホール					
6月8日(木)	17:30	日本アパガニスタン合作記録映画	「よみがえれカレリス」					有楽町朝日ホール	03128410131				
6月8日(木)	18:30	脱原発ジキム・セッション	木村結と脱原発を結ぶ会					水道橋・全通会館ホール					
6月9日(金)	17:30	母性解毒講座	30年代の母性	上野千鶴子				中野区民会議室(中野区役所2階)					
6月9日(金)	18:30	記録映画	戦場の女たち	連絡先	03177018363			杉並区阿佐ヶ谷区民センター					
6月10日(土)	14:00	均等法3年働く女性と政治	三井まより	40213238				福岡女子大学付属図書館視聴覚室					
6月10日(土)	11:00	講演会「戦後の主婦の地位の変化」	09166112411					法政大学	03135910902				
6月10日(土)	13:30	日本女性学会・春季大会	駒尺喜美 Vs 藤枝裕子					婦選会館2階会議室					
6月11日(日)	午後	女が政治にかかわる時	加藤富子	03146618252				日比谷野外音楽堂					
6月13日(火)	16:00	安保も天皇制もいらない!	6月共同行動	03120517363				東京都社会福祉総合センター					
6月16日(金)	18:30	シリーズ「アジア人権講座」	田中宏	03126619471				早稲田泰士館	03120515404				
6月24日(土)	13:30	「アジアの文学と宗教」	高史明					上智大学十号館講堂					
6月25日(日)	10:00	原発にかわる代替エネルギーの可能性について	266415714					大田区産業会館					
6月25日(日)	16:16	つくろう脱原発法	6・25大田のつとめ	03172612524									

# マーガラピー

桑原ちゑ子

—戦争責任雑感—



私には房子という妹がいた。平房生まれの妹である。私の記憶にない妹。その妹があゝ『帝銀事件』の報道記事から思いだされ、私を様々な思いに駆り立てたのであった。

そして今も。

敗戦の翌年に死んだ父。それよりも前に死んでいる妹。房子―平房―帝銀事件―石井部隊―七三一部隊―生体実験―細菌戦―悪魔の報酬―満州―ハルビン―奉天生まれの私―。

一九四五年、八歳の女の子が生後三か月の弟を背負って三八度線を越えた。釜山へ着いた時には意識をなくすほどの疲労から入院した。そして着のまの引揚げがあった。

泣きむしの少女に、たまたま残留孤児にならなかつたような私に、戦争責任があるうとは夢にも思わなかつた。被害者としての自分しか考えられなかつた。しかし、新聞記事から「平房」という文字を見つけた時の驚き、感覚……。これは何なのだろうかと、とこだわり続けたのであった。

そしてドイツの劇作家が木下順二氏に語つたという「自分がアウシュヴィッツ大量虐殺の下手人でなかつたのは、当時自分がまだ少年であつたという偶然ゆえにすぎない。つまり自分がその頃すでに壮年で、もしその仕事に就かされていて、なお下手人―加害者にならなかつたという自信はまったくない」という言葉にであひ、納得する思いがしたのである。私もまた加害者であつたのかと。

思ひ出を語ることもなく過ごした私には、八歳まで住んだとはいへ、「平房」は幻の街である。けれども花園国民学校にかよつた道中で、大人の中国人に「マーガラピー」と叫びながら石をなげ、逃げたことを忘れない。中国語を使うこともなく暮らした生活のなかで、異様な「マーガラピー」(バカヤロウ?)だけを覚えた、恐ろしい不幸な時代であつた。英語はサンキュウから習ひ、ロシア語はミール(平和)から覚えた。韓国からはアンニョンハシムニカと呼びかけてくる。平和な時代をありがたく思う。戦争を起こさないために、戦争責任を考え、戦争を阻止する力を強く強く身につけたいと願う。



# ベトナムへミシンを送つて

高橋 ますみ

今年（一九八九年）二月十四日、ベトナムのホーチミン市（旧サイゴン）、タンソニェット空港に降り立った私は、税関の窓ごしに、出迎えに来てくれているリュウ・チ・レイさんをすぐに見つけだした。八か月ぶりの再会である。

彼女は、ベトナム戦争の激戦地、ブンタオ市の婦人会長。十七歳からジャングルに入り、解放戦線で戦い続けた五十二歳の女性である。日焼けした顔にストレートの髪をひつつめに結び、濃紺のアオザイを着ている。大柄な彼女は、私と目が合うと、赤いアイリスの花束を高々と振って合図した。

昨年六月、初めてベトナムを訪問してから八か月がたち、今度は二百五十台の中古ミシンをたずさえて、彼女に再会することになるうとは、あのときは、想像だにしなかった。

「ベトナム戦争終結後、この十三年で、ブンタオ婦人会の最大の業績は、五台の中古ミシンを自分たちの力で行ったことだ。戦争で夫を失った女性たちや孤児の栄養補給、教育費の足しになっています」

彼女のこの発言がなかったら、私は再度ベトナムを訪れることもなかったであろう。十三年間にたったの五台の中古ミシン！ 私は本当のところ、あっけにとられながら、五台や十台なら、日本でその気になればなんとかなると思った。だが、確約する自信もなく、そのときはありきたりの国際親善、いっしょにベトナム料理を食べ、握手して別れた。

それから帰国以来、私の日常生活は、ベトナムへミシンを送る活動の中にある。家族も身近な友人も、ともども巻き込み、ついでにブラザー工業、そしてNHKや在名民放、各新聞社の協力もえて、活動は全国へと拡がっていった。全国から四百二十台のミシンが集まり、ひとまず締切ったものの、問い合わせがあいつぎ、結局、第



二次募集もすることになり、二百四十五台ほどが集まってきている。

## ”ベトナム“との出逢い

私とベトナムとの出会いは、二年半ほど前に、NHKテレビの新春特別番組、「東海地方の国際化」の座談会にベトナム人のグエン・トリ・ユンさんに出会ったことにはじまる。彼は二十年前、南ベトナム政府派遣留学生として来日し、十年間ほど日本の大学教育を受け、その間祖国統一の学生運動にかかわり、現在は国連地域開発センターの研究者として、名古屋在住の四十歳である。彼の人生は、前半二十年はベトナム、後半二十年日本ということになる。

その座談会には、ユンさんのほかに、イタリアの若い女性、フランチェスカ・ボルベさん、アメリカ人の大学の先生、ピーターハイさん、日本人の大学教授、それに私といったメンバーで、司会はNHKの宮川俊二アナウンサーであった。

のちに宮川さんは、ミシンを届ける旅に同行し、「おはようジャーナル」をはじめ、いくつかのベトナム報道番組を作ることになる。人と人との出会いは何かが始まりそうでスリリングですらある。

「朝鮮戦争、ベトナム戦争で一番もうけたのは、どこの国か、日本人は自覚していますか」とアメリカ人のピーターハイさんは、鋭い口調で指摘し、そのことはひどく私の胸に刺さった。その番組は、東海地方の国際化について、各国の人びとの意見をきき、私たちのこれからの方向を考えあう番組だったので、「では、アメリカ人はベトナムで何をしたのか」ということばを返すこともないと私は思った。

番組の終わり近くになって、「ベトナムは戦後の復興期にあるので、今のうちに、戦争の跡をしっかり見てもらいたい、いっしょにベトナムへ行きませんか」と、ユンさんが呼びかけた。

それから一年半の間に、数人の友人たちと私は、ユンさんを囲んでベトナムについての学習会を重ねた。ときには、一泊の合宿もした。



私たちはアジアを知らなすぎたし、東南アジアの各地域をひっくり回して認識していることに気づいた。固有の歴史や文化を持つ各国。個々の立場から世界を、日本を見ることを、ユンさんから学んだ。とくに、ベトナム人から見た隣接する中国、カンボジア、そしてラオスやタイなどインドシナ諸国のことなどを。

ベトナムは中国の支配下に千年ほどあり、そののち、フランスの植民地になり、日本軍も第二次大戦中に進駐していた。

「ベトナム人は中国に対してどんな感じもってるの？」ユンさんはとっさに、ちょっと冗談めかして、「日本の夫婦の關係にちょっと似てるよ。夫は中国、妻がベトナム。夫を心から好きでなくても、仲よくしていないと具合が悪いでしょ」


彼は、日本福祉大学で国際關係論などの講義も持っていて、各国の歴史的な背景を踏まえて、きちんと客觀的に私たちに説明してくれる。しかし、内輪のグループ学習の気安さもあって、ときには、彼の持つ皮膚感覚の國際觀を垣間見せたりする。

## 旅行団のメンバーたち

ユンさんに出会い、学習会を重ねた一年半ののち、つまり昨年（一九八八年）六月、私たちは、はじめてベトナムへの旅に出た。

一行は二十四人。最年長は、ガラス会社の社長さんで、十年前、中国旅行をこいっしょして以来の友である。最年少は小学校五年生の高橋佐紀ちゃん。おかあさんの岐阜放送のアナウンサー高橋和江さんといっしょだった。和江さんは、小学校の担任に、きちんと旅行の意義を説明して、欠席の諒解を得て連れてきた。

失業中とか、アルバイトとか、定職につく意志のないヤングも加わっていた。「あゝ子育て戦争」でベストセラーを出した矢崎藍さん、作家でへあごらV長年の会員、山下智恵子さん、大阪のサンケイ新聞の細見三英子さん、地元名古屋の中日新聞の松永緑さんなど、ものを書く人も参加していて、各メンバーは、主体的にもを見、自主的に行動する人たちで、私は旅をしながら、メンバーからも多くを学んだ。



新潟国際大学のジョンさんは、オーストラリア人。ユンさんの大学時代の学友で、彼のものの見方、感じ方もユニークで、私は外国人と他の外国を旅する面白さを味わった。

### ベトナムの要人たち

ホーチミン市役所近くのレックスホテルに私たちは常宿した。フランス植民地時代に建てられたもので、宿泊はほとんど外国人。よく停電してエレベーターが止まったりした。料理はおいしく、五階のレストランの一隅でかなでられる一絃琴の演奏は哀調をおびていた。

到着の翌日、ベトちゃんドクちゃんの主治医フォン博士が訪ねて来られて昼食を共にした。

「昼から病院へたずねていらっしやい」と気軽に誘われて、ぞろぞろ出かけて行ったら、分離前のベトちゃんドクちゃんの車椅子での出迎えを受け「こんにちわ!」と日本語で声をかけられてびっくり。ほかにも枯草剤の影響でひどい障害を受けた子どもたちがたくさん入院していた。

生まれたときの身長のまままで四歳半になり、知能も人並み以上、精巧な人形のように枯葉剤ベビーと呼ばれている男の子もいた。

一行の中にはショックで夜には熱を出してしまった人もいる。

フォン博士は、戦争中、フランスへ移住する夫と別れて、子どもを育てながら医療に尽くしてきた人で、現在は国会副議長をかね、新生ベトナムを代表するさわやかな女性だった。

経済庁を訪れた私たちに、「やあやあ待たせてごめんなさい。三十年ぶりの日本語で通じますかねえ」と気さくに語りはじめたのは、国会議員のオアイン経済最高顧問。かつて京都大学を卒業されたのち、ハーバードでも学ばれたとき。南ベトナム政府の副総理を勤め、サイゴン陥落後は、塾居。数年後に国会議員に返り咲いた人である。

戦後のベトナムは経済政策に失敗してインフレに悩んでいると率直に説明され、日本の企業の百パーセント投



資も歓迎すると積極的な姿勢を示された。

ベトナムの政治家は、「政策や指導が失敗だった」と言明してはばからない。日本の政治家は口がさけてもことばに表わしはしないであろう。

のちになって、この三月、駐日ベトナム大使、ポーバン・スンさんが東海地方の視察の折、私たちの開いたささやかなパーティの席上でも「戦後の私たちの経済政策は失敗だった」とあまりにオープンなので、参加者が、「そんなこと一国を代表して言ってしまうていいの」と心配するほどだった。私たち日本人は政治家の率直さに慣れてはいない。

## 「女たちに恥じない行動」をした

大きな政変があると、人びとの運命も一変する。客待ちのシクロ（客乗せ用自転車で、タクシーの役割をしている）の運転手が、かつての南ベトナム政府の高官で、フランス語、英語に堪能であつたりする。ポートビープルになって国を出た人びとの中にも、南ベトナム政権時代の、政治経済の有力者がたくさんいるときく。逆に現在の指導者は解放戦線で戦い、政治犯で捕われていた人が多い。

ホーチンミン市のギブ副市長は、戦争中は、「トラのオリ」と呼ばれる監獄に政治犯として四年半もとらえられていた人。「トラのオリ」とは降る日も照る日も屋根はなし。どうしてそんな状況に耐えられたのかとの質問に「ベトナムの女性たちが立派なので、くじけては恥ずかしいので」との答えが返ってきた。

民族解放のためとか、社会主義実現にはとかの、スローガンのことばではないだけに、かえって私たちには、あたたかな人間らしさ、したたかな強さが感じられて訴えるものがあつた。

ギブ副市長によるベトナムの女性の特徴は、誠実、勇敢、不屈。

「女性の力なくしては、勝ち取れなかった民族の解放と独立でした」と彼は言う。

「千人の女性たちが素手でアメリカの戦車を止めたこともあり、女性たちは、髪の高い勢力」とア





メリカ兵に恐れられていました」

自国の女性たちのことを、勇敢とか不屈といった強さたくましさを表わすことばで、初対面の外国からの私たちに誇る副市長には、新鮮なすがすがしさがあった。

日本の男性が、女性を強さたくましさの特徴をつけて語るときには、椰揄や蔑視がベースにあたりする。日本では、男はたくましく、女はやさしくの思い込みから抜け出ていない。

## リエン副市長

二度目のベトナムのとき、私たちの持っていた二百五十台のミシンをホーチミン市の福祉局を窓口にして手渡したこともあって、福祉担当のリエン副市長主催の夕食会に招かれた。会場はインテリアデザインも上品にまとめられた迎賓館であった。ベトナムでは豊富な大きなエビやカニが次つぎと出された。

リエン副市長は、ホーチミン市の八人の副市長のうちのただ一人の女性である。

その折、私は、先回の訪問の折、ギブ副市長が、ベトナム女性の戦争で果たされた勇敢さを評価されていたと語ったら、彼女は、「ギブ副市長の指導力は大変なものでした。私たちは彼を尊敬しています」と言われた。

この国の現在の指導者たちが、ベトナム戦争中の解放戦線での熾烈な闘いを通して育てあった強固な信頼の念で結ばれていると実感した。

## ミシンを送る活動開始

昨年六月、ベトナムから帰ってから、リュ・チ・レイさんが中古のミシンを欲しがっていたことが脳裏から離れず、かといって活動をどこから始めてよいかの検討もつかず、一か月ほどはうつうつとして日々を過ごした。

いざ人に物をくれとは、中古にしる、言いにくいもので、私は友人に会うごとに、まるでナゾナゾをしかける



ように、「中古のミシンをベトナムへ送りたいんだけど」と切り出してみた。

私が「ベトナムへミシンを送る活動」をためらいながらはじめ、日々憂うつであったのには、幾つかの心のひっかかりがあったのも事実である。

二十四人の旅行団は、ひとまず、グループの総称を便宜上、ハベトナム友好市民の会Vと名乗り、その会で、帰国の翌月、名古屋市婦人会館の一室を借りて、「ベトナム旅行の報告会」を開いた。その前日、私は大急ぎで、「ベトナムへミシンを送る活動に協力してください」と走り書きのチラシをコピーして配ったのだが、四十人ほどの参加者の反応はさっぱりだった。

「いっしょにベトナムへ行った若い人がとまどっているんだけど。その人は、観光旅行のつもりで気軽に参加したんだって。それが、あなたがミシン、ミシンと言いだして、なんだか社会主義の運動に巻き込まれていきそうでこわいって。それに、どうしてミシンなのかもよくわからないって。アジアのどこの国へ行っても貧しいでしょ。そのたびにあれも送る、これも送るって、活動しはじめたらきりがないでしょ」

私はこの忠告に打ちのめされてしまった。

若い人のとまどいを整理し、理解し、心を立ち直らせるのに数日かかった。

戦争を知らない、私の息子たちと同世代の「若い人」に、自分といっしょの活動を期待するほうに無理があると気づいた。

日本の戦後、夫を亡くした女性たちにとって、ミシンがどんな存在だったのか彼らは知らない。そのうえ、彼らが生まれ育った経済の高度成長期には大きな足踏みミシンは狭い住宅事情に追われて、コンパクトな電動に改造され、押し入れのすみにしまい込まれてしまっている。ミシン内職は割りの悪い仕事になり、彼らの母親はパートに出て、子どもたちには、既製品を着せるようになった。

まずミシンへの認識が世代によって異なることを私が覚悟しておくべきであって、そんなことで打ちのめされるとしたら私のほうが甘いわけだ。

それに、「社会主義の運動に巻き込まれそうでこわい」という若い人のことは。

じつは、私はベトナムの正式国家名が「ベトナム社会主義共和国」であることを知識としては知っていたけれ



ど、現状を見ながら旅をしているうちに、意識の底で忘れてしまっていた。

どこの国へ行っても、庶民の暮らしに変わりはない。主義主張はさておいて、暮らしを守り、貧しさと闘い、子どもを育てるのに精一杯だ。そして誰もが戦争はこりこりだと思っている。

私は、ベトナムへの旅を通して、人種や国境、主義を越えて、人と人との草の根の交流の道すじを見つけだした。

リエン副市長が、戦争中も大変だったけれど、戦後処理はもつと大変で、福祉担当をおおせつかったけれど、何から手をつけていいのか途方にふれてしまった、と語った。どんな主義、どんな社会構造になろうとも、社会問題のまったくない人間社会はありえないといい、ただ、その解決に全力を尽くすしかない。

「ボクは、ポートビープルの側に立っているので今のベトナムへ行く気はない」

「ベトナムはカンボジアへ派兵しているからゆるせない。どうしてそんな国へミシンを送る必要があるのか」――

これは、私が内輪の仲間だと日頃から思っていた三十代の二人の男性の発言だった。

日本はかつて、ベトナムを含むアジアの国々に幾多の失礼を犯してきた。そしてピーター・ハイさんが指摘したように、ベトナム戦争で儲けたともいわれている東南アジア諸国の関係がどうであれ、私たちが国際裁判官である資格はない。

戦争の社会的な後遺症を引きずって、貧しさの中にたくさんの女性たちがいる。私たちのちょっとした気づきや、たとえ焼け石に水であろうとも、他の産業がまだ発達していない国で、ミシンがいくばくかのお役に立つものならばと、この活動への批判に出会うたびに私は私の意志を強くしていった。

インドに引かれる人もあればカンボジアと交流する人もある。私たちは人生の途上で出会ったご縁を大切にしたい。どこかどこかの国との仲が悪くなったからと、日本に住む私たち市民までが感情まで対立させてしまうとしたらそれはおかしい。私たちは外国人であろうと、近所隣の人であろうと、人間と人間として



出会い、助けあっていけばいい。

## 舞い込んだミシン提供の情報

報告会でまいたチラシやクチコミで頼んだミシン提供の依頼の反応は、夏が過ぎ、秋九月に入ってからようやく舞い込むようになった。

「ミシン、十七台ほど手に入りました。輸送費がない？　じゃ、カンパも集めます。ミシンの送り先は？　なんとかなるよ」——と第一報を入れてくれたのは、三重県庁に勤める赤塚和則さん。ベトナム旅行をいっしょにしたこれも三十代の仲間である。私は「なんとかなる」ということばが大好きだ。それをことばにして人がいうとき、それに向けて最善を尽くそうとの決意がすでにある。


三重県庁内を一人づつくまなく当たってカンパを集めてくれた。百円、二百円の志であったがその心がうれしかった。七十七歳になる私の母は、その領収書をまた一人づつ書くのに丸二日をついやしてうれしい悲鳴をあげた。

「刈谷のスーパーの前で、蛇の目ミシン並べて売ってたの。古いミシンを三千円で下取りするって。セールスマンに下取りしてどうするのって聞いたたら、車とちがつて中古市場はないから、捨てちゃうって。欲しいのなら三十台はあるから、全部あげるっていうの」

この電話をくれたのは、刈谷市内で、学習塾を営む杉本恵子さんと、のちに、彼女はミシンをベトナムへ届ける旅に、同行することになる。

この話は、担当者が東京へ出張しているうちに、廃棄処分に使われてしまい、ベトナムへは届かなかったのだけれど、活動にはずみがついた点で大きな役割を果たしてくれた。

「ベトナムへミシンを送ろう」と本気になってくれる仲間がいることに私はどれだけ元気づけられたかしれない。



## アドバイスをくれた人たち

ミシンが相当数集まってくると確信がつかめてくると、また次の心配に私は憂うつになっていった。

保管場所、梱包、船賃の問題である。ユンさんや私の母はまだ相当数が集まってくるとの実感がないとみえて、ポケットマネーでなんとかなる、と楽天的で、ビクビクしている私を面白がった。ところが私は、ひよっとして百台を越えるのではないかと予想しはじめていた。

笹川財団の平和輸送サービスに頼めば無料で運んでもらえるとか、在名の大手スーパーに頼みにいくと多額のカンパをお願いできるとか、いろいろアドバイスをしてくださる人々もあった。

中古のミシンばかりを届けたところで、もしベトナム政府が受け取りを拒否したらプリンタオの婦人会へも届かないかも……といった不安もあった。嵐でミシンが船ごと沈んでしまったらなどと、心配しだしたらきりがない。せめて一台でも新品のミシンを付けて送りたいと、私の若い友人で夜間大学へ通いながら、昼はブラザー工業へ勤めている女性に打診してみた。

彼女の友人のまた友人が、そんな窓口になる課の人がいるから電話してみたらと教えてくれた。奮勇をふるって、電話してみたが、要領をえず、今度はベトナム関係の資料をたずさえて、直接訪問してみたが、友人の友人も入社したばかりの若い人で、話は煮えなかった。

そうこうするうちに、中日新聞にミシンを集めていることが紹介され、また、NHKラジオで五分間電話インタビュー、民放ラジオでの呼びかけがあり、そのつど、私の家の電話は鳴りっぱなしになった。

電話の向こうの人々は、ミシンにまつわるその家の家族の歴史を語り、戦後の苦しい家計を支えたミシンを捨ててにしのびず、一つ一つの電話は長距離の長話になった。

受話機を置くとすぐ次が鳴り、ついに、就職決定の知らせを待っていた長男は、もう一本電話を引いてくれと言いだし、ボランティアをかって出た次男は、電話の受け答えをしているうちに耳が痛くなってしまったという。



# ベトナム

ホチミン市婦人職業訓練校にミシンが到着。連日取材する同国のマスコミ隊



視察で実感「自活の援助を」



贈られたアオサイを手にする、帰国した松本八重子とふたたび高橋武夫も金魚

友好の根は市民交流

松本さん「ミミ」訪問記」寄稿

「ベトナムは、今や南米の  
の会の一の一の一、  
ベトナムを訪れた守山  
区向吉の主編、松本八  
重子さん(左)が「ベト  
ナムへのミッシン訪問  
記」と名づけて、本社  
に報告記事を寄稿し、一  
つ。

思ひ明けるこのとき、若原は「おれは、戦後失業者の面影をマリアの女性に写しこんでゐる」と告白す。カレンは手紙を返さずうつつに居た。

私達の到着と同時に、サザン港の遊覧船に「カレン、あがらうか」といふ声があがった。カレンは、若い女性たちから呼ばれた。

市販人談笑訓練校を訪問。  
わが船に上った。

戦争未亡人や孤児のため

り糸がつけられていた。

夜は同市の迎賓会館で、市民訪問団としては真例の歓迎セレクションのものを準備した。市役所には（女性）がお札を述べられた。

海峽を以て領土の境となしてゐる。バレー川の河口といふべき細入会屋屋十間の布製足形が、さうしてゐる。持つて持つて、うらた動いてゐた。この二つ、



「ちょっと家出させてよ」などと冗談めかして、私が外から帰るとほっとして外出した。

そんなさなか、私はこの活動の段取りを決めてくれる救いの電話を受け取った。

その人は、名古屋市内で家族営業の小さいトラック会社で西濃運輸の下請けをしているといった。自分が今日をあるのは母親が戦後ミシン内職で育ててくれたおかげだと。

「ラジオを聴いていて、あんたは、大変ことを言っていることがよくわかっていないようだよ。ミシンは集めてガシャガシャに船に積み込めるものじゃない。LC規格とかいって、梱包をちゃんとしないと通関できないヨ。もう一度、ブラザーへ頭を下げに行きなさい。ミシンの受取、保管、修理、梱包をしっかり頼むことだ。あそこなら、輸出入梱包もきちんとできるはず。梱包がきたら神戸港までわたしが無料で運んであげるから」

私はその親切なアドバイスがうれしくて、受話機の向こうへ何度も頭をさげた。この一本の電話で活動の段取りが整理できた。だがしかし、もう一度、ブラザーへ頼みに行く勇氣はなくて二の足を踏んでいた。

## ブラザーからの救いの手

「ベトナムへのミシンの件で、大変お困りだと人づてに聞きました。私は、ブラザー工業本社の総務課長の松浦といえます。お役に立てることがありましたらおっしゃってください」

思いがけない電話だった。私は氣を取り直してブラザーへ飛んでいった。今までのブラザーとのいきさつも率直にお話しし、お願いしたいのは、保管・修理・梱包だと、トラック屋さんを教えてもらったとおりにお願いした。

松浦課長は、全部一度に諒解はできないけれど、まず保管を引き受け、あとは順に解決しましょうとのことだった。彼は、その後、技術のベテラン、杉戸技師をともなって、ベトナムまでミシンとともに同行し、私たちの内輪の人になってしまった。ただそのときは、彼は、大企業を代表する管理職の人で、感情移入のない単々とした話の段取りだった。そのときはミシンの保管を引き受けてもらえただけでもホッとして、国道一号線に沿ったブラザー本社の玄関を出ると、日はとっぷり暮れて師走の街は氣ぜわしげだった。





私は安堵から、体中の力がへなへなと抜けて、道端にしゃがみ込んでしまいそうだった。通りすがりの車をとめ、めったに使わないタクシーを自分だけのためにおこった。

それからわが家はまた一段と忙しくなった。ミシン提供者に、送り先きのブラザー工業物流センターの住所と船賃カンパの郵便振込み番号を書いた案内状の発送である。

ワープロを打ってくれた大学生の次男に、バイト料に八百円差し出したら、カンパに加えてくれといい、空いている時間はボランティアにあてると約束してくれた。一時は電話攻勢にときどき家出散歩にでかけた子だが、彼なりに自分の生まれる前の日本の戦後に、今のベトナムを重ね合わせているようだった。夫も、ベトナムへと一万円札をカンパしてくれた。この十数年、私の社会参加には、女子どものことにとにかく口をはさまないといった男の沽券からか無視沈黙の人であっただけに、このカンパには私もとまどった。

長男は自分名義の貯金をおろして、ミシンを届ける旅に同行した。

ミシン提供者には、ミシンの頭——機械部分のみをはずし、荷造りし、宅配代を負担し、そのうえ、船賃カンパ一口千円以上を依頼したのである。

五十台を集めてくれた岐阜県恵那地区農業婦人クラブの武藤麻子さん、近隣でガレージセールを催して資金集めをしてくれた松本八重子さん、講演のたびに、壇上から協力を呼びかけてくれた矢崎藍さんなど、多くのひととの真心と行動が活動の輪を拡げていった。

### ミシン職人さんたち

暮から新年にかけて、ブラザーへ何度も見に行ったが、二百台、三百台と全国からのミシンは大台を突破していった。最終的には、四百二十台、製造年月日は昭和十年代から五十年にわたり、二十二メーカーに及ぶ。カラスミシンと総称される、戦後の町工場で作られたものもたくさんあった。職人さんたちの前では、ブラザーミ



シンも他のメーカーのものもまったく平等だった。名古屋空襲で黒コゲになったミシンを再生した経験を馳けたし時代に持っている職人さんたちが定年直前だったのも幸いした。その人たちは、船賃の足しにと、十円玉百円玉のいっぱい入った封筒を私に手渡ししてくれた。彼らも気がついていたら私たちの内輪の仲間になってくれていた。

全国からのカンパ総額は百十七万六千四百四十五円で、総経費百十二万四千三百三十五円を上回り、五万円余りは第二次ミシンを送る活動に繰り越せることになった。

ベトナムへ届けたミシンは修理済みの百五十台、部品の未修理百台である。年代ものの部品に困り、あちこち組み合わせの結果である。

送り先きは、戦争で夫や親を失った女性たちの授産施設、ホーチミン市職業訓練学校、戦争の被害の大きかったフーニン区とブンタオ市婦人会である。

ブンタオ市婦人会は、フランス人が残っていた空き家を利用して、職業訓練学校を作り、私たちの到着を待って、その開校式を行なった。リュ・チ・レイ会長は、「おながが空いているときのひと口は満腹のたくさんのお食ものより貴い」というベトナムのことわざを引用して、日本の市民一人ひとりの心の贈り物がうれしいと挨拶した。今日の目をそして日本の市民の友情を決して忘れないとも。

白と黒との木綿糸をと、高校教師の森田淳子さんが同僚から集めてくれた。そのミシン糸にはマジックで提供者の名前が記してあった。レイさんは何ども何どもそれを両手ですくい上げ、日本の女性たちの心を受けとめようとしていた。

ポーバン・スン駐日ベトナム大使は、この三月、早速、この活動にかかわった人たちの住む名古屋、豊橋、三河の鳳来寺町、大垣と、視察の途上で立ち寄っては講演をし、ブラザー工業へも訪問された。

私の家へもご夫婦で気軽に立ち寄られ、近所のミセスたちが持ち寄った日本のお物菓を味あわれ、冗談をとばしてくつろぎ、もうすっかり仲間うちになられた。



私たちが、次の世代への交流につながればと願って、私の住む近くの、大高北小学校の子どもたちの絵をミッションといっしょにベトナムの小学校へ届けたのだが、小学校へも挨拶に行かれ、子どもたちといっしょに書道を書いたり、ベトナムは私たちの地域にとっても近い存在になった。

「豊かな日本が次に何をめざすのかそれによってその国の市民の資質が問われると思います。それは多分、精神文化の領域でしょう」と述べられたが、これは今後の私たちの課題だと思う。

第二次ミシンを送る活動も自然発生的にはじまり、二百台が五月二十五日、ベトナム船で神戸港を出航した。

この活動の実現と推進は、ベトナムと日本との社会状況を熟知している、ゲン・トリ・ユンさんと私たちの出会いからはじまる。ユンさんは、この活動のキーパーソンであった。国と国、組織と組織といった大がかりものではなく、人と人、市民と市民の出会いが物と心の草の根の国際交流につながっていったと思う。

#### 《草の根協力団体連絡先》

●シャブラニール市市民による海外協力の会

〒160 東京都新宿区西早稲田二―三―一 早稲田奉仕園ス  
コットホール内 TEL03(202)7863

●日本国際ボランティアセンター(JVC)

〒133 東京都文京区湯島三―一―四 会田ビル5F  
TEL03(834)2388

●ネグロス・キャンベーン委員会

〒160 東京都新宿区西早稲田二―三―18 173  
TEL03(203)7637

●アジア井戸ばた会

〒102 東京都千代田区紀尾井町七―一 上智大学ホフマン  
ホール内

●問い直そう援助を、市民リーグ

(援助の問題に取り組む日本で最初の市民団体。活動  
内容は、調査研究、開発教育、海外とのネットワー  
クづくりなど。)

〒174 東京都板橋区若木二―一三―九 九二二(井上)

# ベトナム旅行記

高橋 佐紀

一日目（六月十三日）

タイのバンコクからエア・フランスに乗り、ホーチミン市に着いた。

飛行機の中から見た空港は、かつ走路のあいだに鉄が積んであったり、小さな小屋が作ってあったりして、日本やタイの空港とは比べものにならないくらいさっぱうけ이었다。空港の中に入ると、書類検査をする所があった。そこは木のほうで通れないようにしてあって、検査に合格すると木をぬいて通すしくみになっていた。そこを通ると、すごい人の数だった。また手続きをして、やっと空港の外へ出た。そして、お母さんがさっそくカメラを出して、写真をとりに始めた時、わたしは（あれ？）と思った。急にそれまで横を向いてしゃべっていた人も、カメラのほうを見てがやがやと少しさわぎはじめたのだ。私はしばらく周囲の様子を見ていてやっとわかった。ベトナムの人は一人もカメラを持っていないのだ。だから、カメラがめずらしいらしい。私は（話は聞いていたけれど本当にまずい国なんだなあ）と思った。しばらくして、ホテルに向かった。私は思っ

たよりも日本と変わらないのにびっくりした。建てるものはアパートのような高いものが多いし、道路はちゃんとアスファルトで広くて、ちゃんと通るのはじつこには一だん高くしてある歩行者用の道路がある。けれど、日本だったら自動車は大部分だけれど、ベトナムは自転車が大部分で、バイクや自動車車が時々通るぐらいだった。

けれど、建てるものは新しいのはなくて、所どころひびが入っていたり、黒ずんでいた。時々フランス風の建てもあった。そのフランス風の建てもはどれもとてもきれいだ。

やっとホテルに着いた。そことても高い建てるもので、五階建てで、おく上の上にプールがあるホテルだった。部屋に入って四十分ぐらい後にみんなで辺りをさん歩することになった。

外に出ると、すごくむし暑かった。ベトナムはふつうでも三十八度ぐらいあると聞いていたけれど、つゆの時期だったので、まだ三十二度か三十三度ぐらいしかなかった。けれど、立っているだけでもあせが出てきた。私たちはお母さんが、ホテルの周りの写真をとっていたので少しみんなとおくれて歩いていた。そうしたら、ベトナムの子供たちが遊んでいた。自分のくつ（ゴムのサンダルのようなもの）を投げあいつこをする遊びらしかった。私たちが通ると、こちらを見てニヤッとわらいながらにかしゃべっていた。ちょっと立ち止ま

っていると、くつを私たちの足にあててきた。私はムカッと  
きて、いそいで通りすぎた。お母さんに話すと、

「うらやましいんだわ。」

と言ったけれど、私は（でも第一印象はぜったい悪くなった）  
とまだムカッとした気持ちが残っていた。

車に乗っていた時は気にしなかったけれど、家の中にある  
お店よりも外に出ているほうが多かった。食べ物売るお店  
は日本のお祭りの時のやたいの半分ぐらいのお店で、屋根な  
んかせんぜんない所で売っていた。たばこは、主に子供が売  
っていて、ランドセルぐらいの大きさの木のはこに入れて、  
地面にすわって売っていた。他の物は下にむしろのようなも  
のを売って売っているのがだいたいだった。もう夕方になっ  
てきたので、少し暗くなってきた。海にやっと出た。そこで、  
いっしょに来た伊とうさんが日本から持ってきたつぶのガム  
がいっぱい入ったプラスチックのはこを出して、子供たちに  
あげようとした。私はとてもびっくりした。あつという間に  
辺りにいた子供たちが伊とうさんの周りを取り囲んでしまっ  
た。そして、手を出してなにか言っていた。伊とうさんはす  
ぐガムをしまってしまった。それでだいたいはあきらめてど  
こかへ行ったけど、五、六人の男の子たちがあとをついてき  
て、ガムを出して食べるまねをししばらくして、とてもガムを  
ほしそうだつた。このことがあってから、物はまちではあけ  
ないほうがいいことがわかった。

夕食はホテルで食べた。その時初めてサイゴンツーリスト  
の通訳ズンさんや、ユンさん（ベトナム行きをよびかけた）  
のお父さんとお母さんに会った。

ズンさんは、とても日本語がじょうずだった。そして、と  
ても楽しい人でみんなと楽しそうにたくさんしゃべっていた。  
ユンさんのお父さんとお母さんは九人も子供がいる、という  
話をきいて、私はとてもびっくりした。けれど、日本も戦争  
中は子供をたくさん産んだので、（ベトナムも十数年前まで  
戦争をやっていたんだから同じだ）と思った。

その日のねる前に、お母さんが、

「明日、朝早く起きてさんぼしない」

と言った。私はおもしろそうだったので、

「うん。いこうね」

と、約束してねた。

## 二日目（六月十四日）

朝六時ぐらいに起きて、すぐ散歩に行った。まだ六時だと  
いうのに、大通りは自転車がうじゃうじゃ走っていた。横の  
小さい道では、子供がもう遊び始めていたりしていた。

最初に見つけたのは、映画館だった。日本の映画館のよう  
に大きな絵が上にかざってあった。その前の道に子供がいて、  
その横にくさみがおいてあってにわとりとひよこがいた。そ  
れもはなしがいで、子供は平気でだいたりしていたので、

（日本では考えられない事だなあ）と思った。

道の大通りのほうに日本の並木と同じように木が植えてあった。私は（並木道はいいな）と思いながら歩いていたら、木と木にハンモックがかけてあって、そこで男の子がねていた。お母さんがカメラでそこをとろうとした。そうしたら、男の子のお母さんのような人が飛んで来て、なにか、ベトナム語で話した。どうやら、お金をくれたらとってもいいと言っているようだった。けれど、来たばかりで、ベトナムのお金、ドンはまだ持っていなかったので、お母さんが、英語で（ベトナム語がわからないので）

「ノーマネー、ノーマネー。」

と言って、とるのをあきらめて歩いて行った。すると、ちょっとした林の中の公園のようなものがあった。その周囲を回って、Ｕターンして、ホテルの方向に向かって歩いていった。そこで目についた人がいた。三、四人の十四さいぐらいの男の子が、なんとたばこをすっていたのだ。私はとてもびっくりした。日本では十八さい以上しかすえなくて、ベトナムではそういう規則はないにしろ、ちょっと信じられなかった。でも男の子は平気なかんじでピースしてきたので、お母さんと私は、

「ちょっとおもしろくない？」

「うん。とっとこう」

といってカメラでとってあげた。



もう少し歩いた所にゆうびん局があった。その前のちよつと広めの道に三十こぐらいの所がむしろをしいて、その上に絵ハガキやふうとう、びんせんなどがおいてあった。私たちはちよつとだけ絵ハガキを見た。日本のように、一セットになっていた。五種類ぐらい見た。けれどベトナムのきれいな所ばかり絵ハガキにしてあるので気に入るのがあまりなかった。最後に気に入ったのがあったので、午前十一時に来る約束をしてとっておいてもらった。

ホテルで朝食を食べた。食事はうどんのような物だった。けれど、めんはもっとペラペラだったし、おつゆの味はラーメンのような感じだった。けれどきのうの料理より、日本的だった。

その後中国の人が住んでいるシュロン地区へ行った。お寺のような所へ行ってお参りをした。その入口に花火のようなものを売っていた。けれどそれはおせんこうだった。長さが五十センチぐらいで、とても長いのでおどろいた。

それから植物園と博物館へ行った。名前はベン・バオ・タング博物館といった。その博物館の前にチョムチョムというくだものを売っていた。大きさはピンポン玉ぐらいで、一センチぐらいのやわらかいとげが、そこらじゅうに生えていた。外のかわをとって、中の白いぶどうのようなものを食べた。とても甘くて、おいしかった。

博物館の中は、ベトナムの地図の中にどこにどんな民ぞく

がいるかというのとか、ぞうげとか、いろいろな物がかさつてあった。

水牛のほねのペンダントがあった。まだお金を持っていないので、残念がっていたら、つうやくのズンさんが買ってくださった。

#### ホーチミン市の市場

ホテルからホーチミン市の市場へ行った。とても広い市場で、ふつうの学校ぐらいあった。中に入ると、いろいろなお店がならんでいた。食べ物はあまり売っていないくて、サンドルとか、うきわとかが多かった。けれど、水着はなかった。くだものもいっぱいあって、ミニバナナ・ぶどう・ドリアン・ハチミツなどが多かった。ねだんは日本で、とてもたかい物が、二、三千円ぐらいで買えた。

私はサンダルを買ったけれど、二足五百円だった。私は、(とても安いなあ。日本の人がベトナムへ来たら、大金持ちになつてるだろうなあ)と思って、とても安いのにびっくりした。

その後、市場を出た所にアイスクリームを、子供が売っていた。木のはこの中にアイスクリームを入れているようだった。お母さんが一本買って、私に、

「食べたなら」

と、言ったので、少しなめてみた。最初のうちは少しだった

のでよかったけれど、後のほうになってくると、だんだん気持ちが悪くなってきた。(やっぱり、ベトナムのアイスクリームは口に合わないや)と思った。

ホテルで昼食をとってツーゾー病院へ行った。庭では木と木にネットをつるしてバレーボールをやっていた。

お茶をのみながら少し話を聞いて、病院の中を案内してもらった。病院はとても広くて、二つに分かれていた。大きさはふつうの小学校ぐらいだった。

どの病室にも、ベットがたくさんあって、人がたくさんいた。日本とは大ちがいだ。六じょうぐらいの所に、病人が四人から八人ぐらいいるのだからおどろいた。三階を案内してもらったのだけど、みんなの病室とはちがうしずかな部屋があった。そこは外がみえるまどのない、わたりろうかのような所の向こう側にあった。そのろうかの中であわい赤ちゃんがいた。生まれて一年もたっていないように思えた。けれど、ユンさんが言うにはその子は四さいだった。とてもびっくりした。(こんな小さい子が四さいだなんて。きつとこれもかれ葉さいのえいきょうなんだろう。アメリカはどういうひどいことをしたんだろう。今になってこういうことができるなんて)と、アメリカを少しうらんだ。

それからさっきのしずかな部屋に入った。そこにはベトちゃん、ドクちゃんがいた。「えっ!」と思った。ベトちゃんたちの手じゅつをした病院には行くと聞いていたけれど、

まさかいるとは思わなかったのだ。

ベトちゃんたちはベットとうば車がいっしょになったようなものにねていた。ベトちゃんはねていてドクちゃんはすわっていた。

いっしょに来た人たちは、日本から持ってきたものをベトちゃんたちにあげていた。私は、飛行機などで折っていた、つるをあげた。千羽にはならなかったけど、けっこうたくさんあった。みんなからもらったあと、ドクちゃんが、「アリガトウ。」

と言ってくれた。私は日本語で言ってくれたのもうれしかったし、よろこんでくれたのも、とってもうれしかった。

その病院をでて、今度は市やく所へ行った。市役所といっても、お客さんを入れる所なので、日本の市役所とは大ちが違った。

たてものは、フランス風で、クリーム色と、白で、とてもきれいだった。

副市長さん(ホーチミン市の)に会って、お話を聞いた。

副市長さんが、むかし兵たいでひどいことをされたお話、ポートピアのお話、いろいろきいた。みんなも私も、しずかに、しんけんきにきいていた。今のベトナムが、いろんな間だいをかかえていることを、身にしてみても、かんじた。

話がおわり、外にでると暗くなっていた。ホテルが近くて、すぐ帰って食事へ行った。



# 五・四 天安門前広場

## 中国の学生パワーを見た！

芦澤 礼子



四月二十九日から五月七日までの九日間、私は中国へ行った。北京清華大学で行なわれた社会人向けの短期語学留学に参加したからである。もちろん語学力の向上が目的であり、申し込んだ時には中国の現在の状況など思いもよらなかった。しかし、連日の中国関係の報道を見ながら、もしかしたら北京の民主化運動を目撃できるかもしれないという期待は次第に高まっていった。

私は大学時代に中国現代史を専攻し、とくに知識人層が打撃を受けた一九五七年の「反右派闘争」を卒業論文のテーマに選んだこともあって、今回の状況には大きな関心を寄せていた。一九八七年に民主化運動が失敗して胡耀邦氏が辞職したとき、私はちょうど卒論を提出する時期だったので、三十年前と比べてあまり進歩のない政府のやり方に失望を感じたことを覚えている。今回その胡氏の死去によって再び民主化要求が高まってきているが、果たしてどこまで要求が受け入れられるのか？

# 我们发出撕心裂肺的吼叫。



党指導者層の対応は？ 87年の二の舞になる恐れはないのか？

：中国に行つてどれほどのものを見られるのか見当はつかなかったが、とにかくできるだけ機会を作つて現状を見て来ようと心に期するものがあつた。

清華大学は理工系の最重点大学であり、人文系の最重点大学である北京大学と並んで中国の最高級エリートを養成する所である。と同時に、今回の学生運動では共に指導的役割を果たしている。中国へ行く前に授業ポイコットなどの動きが伝えられていたので、果たして授業は予定どおり行なわれるのだろうか？という不安はあつた。

この不安は当たらなかつた。留学生向けの授業は全く予定どおりであつた。ただし、中国人学生は授業ポイコットを続けているらしい。校内は平穏な雰囲気であつたが、一か所にビラや壁新聞がまとめてたくさん貼つてある場所があつた。授業ポイコットの呼びかけ、公正な報道を訴える文章などにまじつて「我々は死を恐れない！」などという勇ましいものもある。その脇では学生が胡氏追悼デモの時の写真を売つていて、黒山の人だかりがしてゐた。

五月一日、メーデーに天安門広場へ行つた。四月二六日以降大規模なデモはなく、北京市内にはメーデーのお祭ムードが漂つてゐた。建物はイルミネーションで飾られ、夜景がとても美しかった。「こんなに平和なのに、帰るまでに果たして学生デモが見られるだろうか？」と、私はふと心配になつた。デモを見るのが目的で来たわけではないが、見ないで帰るのは残念な気がする。北京日報によると五月四日は「五・四運動」記念行事が天安門広場で行なわれるため、大幅な交通規制が敷かれるという。「五・四運動」は一九一九年に行なわれた愛国的民衆運動で、今年ちょうど七十周年だ。その日に合わせて学生運動もヤマを迎えるのではないかという情報が入つた。五月四日の午後は皆で天壇公園へ行く予定だが、私はそれには参

# 我們的心遭到了嘲弄，

加せず天安門へ行こうと決心した。

五月四日、このところ北京は天気が良くて連日28℃くらいにまで上がる暑さだったが、この日もカンカン照りであった。地下鉄に乗って天安門広場の最寄りの駅である「前門」で降りようとしたが、通過してしまった。交通規制がかなり厳しいらしい。次の駅「崇文門」で降り、てくてく歩いて天安門方面へ向かった。かなり距離がある。三十分ほど歩いてようやく北京飯店のあたりまで来た。ここから天安門はすぐ近くだ。人通りがだんだん多くなってくる。何やら旗を持って広場から出てくる集団がいる。デモだ！ 広場のほうはどうなっているのだろうか？ 公安が広場の周りを固めているのではないだろうか？

天安門広場に着いた時、時刻はちょうど三時頃だった。広場には大勢の学生が集まっていた。列を組み、手にスローガンを書いた旗を持って次々に広場から外へ出てくる。私は少しでも近くに寄って見たくなった。幸い公安が固めている様子ではない。私は人びとと一緒に広場の柵を乗り越えて中に入った。前日には鎖で囲ってあった人民英雄記念碑の上は人が鈴なりになっていた。何とかその上に登ることができたので、上から写真を撮った。北京大学、清華大学、北京外国語大学、工芸大学。それぞれの大学の旗を持ち、口々に自由、自治などのシュプレヒコールを叫びながら、学生たちは人びとの作った花道の間を行進してゆく。新たな大学が通る度に割れるような拍手。彼らは悲壮な顔つきではなく、皆デモを楽しんでいるようであった。火炎ビンが飛ぶような過激さはなく、全体的にはかなり統制がとれているような感じだった。ただ、あちこちにガラス瓶のかけらが散乱していたのが気になった。後から聞いたところによると、これは鄧小平の“平”と“瓶”が同じ音であることから、鄧氏への抗議を表わしたものだそうである。

私は人民英雄記念碑から降り、デモ隊に近づいて読めそうなスローガンを書き写した。『真成平等對話』『新聞要平等報道』などにまじって『邪邪我没錯（おばあさん、私は間違っていない）』というのものもある。それらの中に『我們——小撮嗎？』というのがあった。この『撮』の字が良くわからなかったので、私は隣にいた学生に「这个字什么？請写一下（この字は何ですか？ちょっと書いて下さい）」と言った。彼は親切に説明をまじえながら書いてくれた。「日本人か？」と聞かれたので、「私は日本人で清華大学の短期留学生だ」と言ったら彼は大喜び、猛烈な勢いで話し始めた。私の貧しい語学力ではとてもついていけず、ほとんど聞きとれない。ただ

# 我们发出撕心裂肺的吼叫。

切れ切れに、報道への不満や李鵬首相への批判などが聞かされる。彼の言いたいことはわかるような気がするが、文章として頭に入

ってこないのが何ともしどかしかった。いつのまにか周りに人垣ができていた。彼の話はますます熱を帯び、合の手を入れる学生、録音をとる学生など、大騒ぎになった。「彼女は誰だ」という声に、彼は「日本朋友」と答える。「いつ中国へ来たのか?」「中国語はどこで学んだのか? N H K か?」などと私に聞いてくる人もいる。私は人垣の中で途方にくれた。「デモに参加しよう!」と誘う人もいる。どうしよう……。私は知っている単語をかき集めてやっと言った。「日本人は中国の事情についてあまり知らないので、帰国したら必ず今日の話をお願いします」

皆大変喜んでくれた。そして私は彼らに別れを告げ、人垣の中から、抜け出した。気がついたら、相手の学生さんの名前はサインしてもらったのに、自分の名前を告げるのはすっかり忘れていた。熱さと興奮と早口の中国語のおかげで頭がぼーっとしていたのだ。時計を見たら、広場についてから二時間近く過ぎていた。

後から落ちついて考えてみると、このことはやはり「すごい」体験であった。まさか直接学生と話せるなんて夢にも思っていなかったのだから。今さらながら、もっと語学力があれば……と悔やまれてならない。そうすればもっと細かい事情が理解できただろうし、自分の考えも言うことができたのに。あの学生さん「鍾東葉」さんが書いてくれたことを訳したら、このような内容だった。



# 我們的心遭到了嘲弄，

「五月四日、およそ二十万人の人民が天安門広場にて民主を勝ちとるデモを行なったが、それによって人民の力量が必ず当局を振撼させるのに十分であることがわかるだろう。政府が人民の気持ちを諒解することを望む。二十万人の人民はけっして当局側の言う『へい小撮』ひとつまみ』ではない」

先生たちや留学生たちの学生運動に対する意見はさまざまだった。先生たちは概して学生に対して同情的であり、中国の知識人層に対する待遇の悪さ、教育制度の欠陥などを嘆く声が聞かれた。日本人留学生の中にはさめた見方をしている人もいる。私の友人で長期留学中の女性は「学生だけがやっていてもしかなかった。この国の普通の人民はやる気のない人が多いし向上心が見られない。ただ生きてるだけって感じ。もっと自分の可能性とか考えないのかってイライラしちゃう。」と言っていた。この見方には少なからずショックを受けた。確かに普通の人たちは国家のことなんてあまり考えてないし、考える余裕すらないのかもしれない。運動している学生たちはまだ考える余裕もあり、国家への期待を持っているからこそ運動をするのであろう。この期待が裏切られなければよいが……私は心配になった。

私が帰国して一週間後、ソ連のゴルバチョフ書記長が訪中し、中ソの歴史的和解が成立した。その時点での民主化運動の盛り上がりとはゴルバチョフ帰国後の指導者層の保守反動化、北京への戒厳令発動については新聞で詳しく報道されている。私はがっかりした。ああまたかと思った。この国の指導者たちは87年と同じことをやろうとしているのだろうか？文化大革命への反省はどこへ行ったのだろうか？趙紫陽氏失脚のニュースも入ってきているが、トカゲの頭切りでは何も解決しないのではないだろうか？

「言論の自由」は、たとえどんな政治体制を取っている国でも保障されるべきだと私は考える。今回、武力での制圧はどんなことがあっても避けるべきであると思う。毎日テレビにハンスト中の学生が写るが、あのへんさんへはこの中にいるに違いない。あの日のこと、伝えましたよ、だから頑張って！と私は毎日テレビの画面に声援を送っている。

中国人需要民主、日本人也一定需要民主。但是在日本没有运动。为什么？现在日本真是民主国家吗？你的意思怎么样？



「恨」がきこえた

4月21日のハあごらV学習会Ⅲ「日本とドイツ——その戦争責任について」は、画家・富山妙子さんを講師に、充実した内容の学習会となった。

富山さんのお話とスライド「海の記憶」の上映、そして参加者とのディスカッションという構成。

「ギャラリで絵を並べている。壁に貼って来る人をジッと待っている。そんな「待つ女」でいるのがイヤになった」のをきっかけに、富山さんは様々な表現方法を選びとっていった。

21日上映したスライドのテーマは「朝鮮人従軍慰安婦」。視覚化するのが

難しい「性」を、避けるわけにはいかない。戦争が終わり、半世紀近くたった今も「朝鮮ピー」とよばれた彼女たちの消息はわからないという。その「恨」の声を富山さんは絵に託し、スライドを作った。

深い闇の色「黒」。「性」と「生」を象徴するような「赤」。海底に眠る骸骨の「白」。なかでもほとぼしるようなエネルギの「赤」に、参加者は圧倒された。

「日本の親がさんざんしゃべったこと、それは自分たちの悲哀ばかり。ひどいものを食べた、空襲がどうだった。そんなことばかり」と言う富山さん。

彼女が、もっとも表現したいものを描き、伝えようとする姿。それ自体が強烈なメッセージであるように思えた。

そして——。学習会当日、参加者の誰もが、慰安婦たちの「恨」の声を、自分たちの耳で確かに聴いた。聴こえたに違いない、と、この学習会を主催した事務局の一人として思いたい。(石黒真貴子)

## 女性内閣誕生

— 5・12集会に参加して

○もう、半月たつんだなア。ホラ、この間の「いま。だから、女が政治を！」。

●ああ、テレ朝の「ニュース・ステーション」でチラッとみたよ。

○うん、5月12日に感じたあの熱気を、なんとか忘れないでいようと思って。

●それでポーツとしたり、1人でソワソワしてるわけ？

○あのと、実行委員会の森冬美さんに聞いたんだけど、銀座のヤマハ・ホールにナント！六五〇人集まったんだってよ。

●すごいね。入場料はいくらだったの？

○千五百円。アルバイトしてる私の、時給二時間分ですよ。でも、十分、その価値はあった。

●どんな人たちが来てた？

○20代から80歳ぐらいの人まで、幅広く。いかに日本中の女が、今の男の政治に

不満を抱いてるか、ってことだね。

○とにかく、みんな期待感を持って来た

○これも委員会の森さんのお話だけど今でも「賛同費を送りたい」という声が全国から続々と来てるんだって。そういう話を聞くと嬉しくなるね。12日に19人の閣僚の話を聞いて思ったけど、ほとんどの人が「現在やっている○○をやめま

は具体的に何するの？

③そう、興奮しなさんな。ところで君

〔編集後記〕 突如としてフェミニスト党の話が持ち上がり、事務局は興奮と多忙と…。さらに難題はハチきゅうクラブから斉藤さんに立候補の強い要請があったこと。皆さんはどう考えますか？大至急ご連絡ください。



## 日本初の“フェミニスト党”誕生!!

男性議員にはもうまかせておけないと、七月の参院選には女性の立候補者が相次いでいますが、フェミニストとエコロジストが手をつないだハチきゅうクラブVがあらたに誕生、五月三十日、クレヨンハウスで記者会見を行いました。比例区立候補者の金住典子、円より子、ゆみこ・ながい・むらせ、山本コウタローさんの熱弁に加え、田中喜美子、斉藤千代、田嶋陽子さんも応援スピーチ、しま・ようこさんの会場発言もあり、超満員の取材陣も、熱気に打たれたようでした。

斉藤さんは、「選挙は立候補者が大金を使うのではなく、選挙民がお金を出して自分を守る候補者を選ぶのが筋。それをしなかった結果、いま毎月五千九百円平均の消費税を払っているが、候補者に依存する『草の根金権体質』を解体するためにポスターを売りまくって資金をつくりたい」とスピーチ。ハこら新宿Vは、ポスター募集と作成の仕事をさっそく始めます。皆さんの手づくりポスターをどしどし送ってください。印刷原稿に適したものは印刷してポスターにします。キャッチフレーズは、入りたい方はご自分で考えたことばを入れ、こちらに一任したい方は一任してください。

「女の手できれいにしよう 地球も政治も」「わたしの声が届く政治を」など。

あなたの声を  
ポスターに！  
参院選にかける思いをポスターにしてください。大きさ、色数、字数、その他、いっさい制限はありません。お子さんの作品も大歓迎。文字だけのポスターでも結構です。

夏合宿は  
8月19、20日に  
変更

参院選の投票日が7月23日に決定したため、7月22、23日に予定していたハ長野合宿Vの日程を急変更しました。また、テーマを「わたし流フェミニズム・大討論」に変えました。パネリストは、高橋ますみさんのほか、長野の方々も。